
詐欺師も所詮は男であって・・・

もこりん

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

詐欺師も所詮は男であつて・・・

【Zコード】

N2126BA

【作者名】

もじりん

【あらすじ】

天才詐欺師の椎名紫闇の今度の獲物は、ファミレスで働くおつとり少女の十六夜美姫。

彼女をターゲットとして一緒に暮らすことになつたが彼女の実家はあたりでは有名なやぐざ一家！！

騙せば殺され、事実を言つても殺され、別れても殺される！

そんな紫闇に残つた選択肢は、美姫とうまく付き合つていくことだけです！？

事実は小説よりも奇なり

「えっ！もしかして私・・・、騙されたの？！」

詐欺師の手に掛かつた者たちは、今宵もこの言葉を静に呟いている。

今回の獲物は世間知らずのお嬢様だつた。俺、椎名紫闇しいなしづかはたぐいまれなる技で結婚を夢見る女性に近づき、罠にはめる。いわゆる結婚詐欺師だ！

そして俺の個人情報は一切手に入らない。名前も履歴もその場しおぎのもの・・・。

そんな俺の次のターゲットととして選ばれたのは、俺が前から気にかけていたファミレスで働く少女。

おつとりとした雰囲気を持ち、この世の汚い部分など何も知らないような現代では珍しいタイプの少女だつた。

だが、その割には身につけているものはどれも高級品ばかり・・・。容姿もまずまずだつた。

詐欺師にとつては夢のようなターゲットだ。

俺はさつそく作業に取り掛かつた。

ファミレスに行き席に着くと、なんと彼女の方から声をかけてくれた。

「いらっしゃいませー！」注文がお決まりになりましたらそちらのボタンでお知らせください

彼女はそう言つてボタンを指さすと、お盆から水を持って俺の前に置いた。

「ありがとうございます」

いつものパターンならここで俺がコップを倒して会話の輪をひろげる。

多少ベタだが『事実は小説よりも奇なり』なんてことわざがあるし、それに世間知らずの奴には多少怪しくても大丈夫だつたりもする。むしろいつこう出会こを望むロマンチストだつているはずだつ！――

だが、今回はいつもと勝手が違つた。

彼女が「はい」と紫闇の目の前に置こうとしたコップは彼女の手からこぼれおち、なんと俺の顔面にコップの水が思いつきリヒットした。

「あつ……」、「ごめんなさい――！」

彼女は謝りながら布を取り出して俺の濡れた部分を拭いた。

「本当にごめんなさい……」

「だ、大丈夫ですよ。よくありますから」

あまりのいきなりの出来事に俺はつい言葉の選択を誤つた。

今の現状は、カレーうどんの汁を服に飛ばしてしまつたとはわけが違う。

水を顔面にかけられるなんてそうそうない。

せいぜいそんな体験は別れ話を切り出した時か、いじめにあつてるかだ。どちらにしても決して良い印象をもつてはくれないだろう。

「おいつ、君――何しとるんだ！」

どうやら騒ぎを聞きつけて責任者が来たらしい。

彼は、彼女が必死に俺の濡れた顔を拭いている布を奪い取つた。

「君――これは濡れた床を拭くものだと教えただろう――」

彼女は半泣きになりながら責任者さんに言い返した。

「で、でも、店長がこれは濡れた所を拭くものつて……」

どうやら彼女にとつて俺は濡れている床と同じ扱いだつたらしい。

そして散々叱られた揚句、結局彼女は店をクビになつた……。

袖すつぬわも先生の縁

俺は仕事をクビになってしまった彼女と公園のベンチに座つていた。

「あの、さつきは本当にすみませんでした。私馬鹿だからよくあります」

彼女は申し訳なさそうにうつむいたまま何度も俺に謝罪してくれた。

「いや、全然平氣だよ。それに少しラッキーだった。君と知り合ふるチャンスが出来たんだから」

「うつ落ち込んではいるときこそ慰めの言葉は胸にしみるものだつ！彼女を虜にするには今しかない」

「ありがとうございます……。あの、お名前を伺つてもよろしきでしょうか？」

よしつ！彼女は段々と俺に對して警戒が薄れてきていた。うつなれば付き合つまでは割と早いはずだ！

「俺は椎名紫闇。君は？」

「私、十六夜美姫と申します」

「あのや、携帯のメアドとか教えてくれないかな？変な意味じやなくて、今田こうして出会えたのも何かの縁だと思うし。急にバイトをクビになつたやつたら色々と大変だろ？なんでも相談に乗れるようにな・・・」

「ありがとうございます」

うつして俺らはメアドを交換した。今会話を聞いて「うんぐれこ」とか感じる奴らーそこは深く詮索するなつ！袖すりあつも先生の縁つていうだろ？今日こきなり会つた密とメアド交換なんてめつたにないけど、先生の縁でも利用できるものは利用しとくもんだよ。

それから俺らはしばらべベンチで話してゐた。

「・・・実は私、今家出してるんですね」

「家出?」

「はい。私の父親が本当に口うるやくて、それで勢いで・・・。知り合いで協力してもらつてアパートを借りるところまではなんとか出来たんですけど、バイトクビになつちやつたから、もつ家賃が払えなくなつて・・・」

彼女にとつては大惨事だらうが俺にとつてはまんざり悪口話でもない。

「じゃ、じゃあさ、次の仕事が見つかるまでの間だけ、俺の家に来ない?」

「い、いいんですか?」

こんな怪しい話になんのためらいもなく乗つてくるのは、おそらく彼女だけなので、お勧めは出来ない口説き方だ。

俺自身、こんなにあつせりOKしてくれるとは思わなかつた・・・。

ハハして俺と美姫さんとの同居が始まったわけだ。

恩に着る

俺は美姫さんを家に連れて自宅へ帰つていた。

「ここが俺んちだよ」

俺はそう言つてドアの鍵を開けて彼女を中へ通した。

「うわ～。素敵なお部屋ですね」

彼女は部屋を一通り眺めていた。

「紫闇さんってお仕事は何をしているんですか？」

「俺？ 実はフリーターです。レンタルビデオ店のバイトしてんの」「これは嘘ではない。さすがに「詐欺師です」なんてことは絶対に言えないで、とりあえずアルバイトの方の事を言つて、フリーターということにしてあるのだ。

「へえ、レンタルビデオ店ですか・・・。すゞいですね、ちゃんとバイトを続けてお家を借りて、尊敬しちゃいます」

「そんなことないよ。俺から見たら、美姫さんの方がすゞいと思う。・・・。いきなり家出して、バイト見つけて頑張つて。今回はちょっと運がなかつただけだよ」

「いえ、違うんです。」

「何が？」

「今日のバイトで5回目なんです。クビになつたの」

俺はその話を聞いた後に「えつ」と言葉を漏らしてしまつた。確かに今日の彼女の失敗は偶然なんかでかたづけられるようなことはなかつた。しかし、まさか5回もチャンスを無駄にしていたとは・・・。

「私、本当に馬鹿ですよね・・・。今日だつて紫闇さんに助けてもらわなかつたらどうなつていたか」

「いや、俺は美姫さんみたいに可愛い人とこつして一緒に暮らせることになつてすつゞい嬉しいし、俺は美姫さんのそういうおつとりしてるとこか、嫌いじゃない」

俺は美姫さんから視線をそらした。

勿論これは演技上のセリフだが、女の子にこんな言葉を言つのは何回やつても慣れないのだ。

「ありがとうございます！私も紫闇さんの事、大好きですっ！」
「だ、大好きっ！？」

出会つてものの数時間でそんなことを言われたのはおそらく詐欺師人生で初かもしれない。

「だつて、見ず知らずの私を自分の家に置いてくれるなんてそういうことだし、紫闇さんのそういう優しいところが私は大好きです」

美姫さんの輝くような瞳に俺は一瞬心苦しくなつてしまつた。彼女のよくな純粋な目が俺の一番嫌いなものだった。

どうやら彼女にとつて俺のとつた行動はそうとうにありがたいものなのだろう。

まあ、早い段階で色々と恩を着せといた方が仕事も早く済みそうだし、詐欺師としては中々の展開だ。

それから美姫さんに夕食を作つてもらい、一人でそれを食べていた。彼女は意外に料理は結構上手かつた。

そのあとは、色々と世間話をしていた。一人に訪れた穏やかな時にそれは突如起こつた。

「おい！ちょっと邪魔するぜっ！」

いきなり扉を蹴り破つて厳つい男どもが入つてきた！

奴らは俺と美姫さんの手を縛り、車に乗せた。

「あ、あなた達は・・・」

さすがに動搖しているのか、美姫さんの声は震えていた。

「お前らはなんなんだよ！」

俺も美姫さんの後に大声で叫んだ。

「テメーはおとなしくしてろ。そうすれば手荒なことはしない」

俺達は満月があたりを照らす中、何もできずにただ先の見えない

道を進んでいった。

人はみかけによらない

俺と美姫さんは謎の男達に連れられて、とある屋敷にやつってきた。そこには木造建築で、庭や外觀を見ただけでも和風といつ雰囲気がそこら中に漂っていた。

何も申し分ない屋敷あつたが、ただ一つ不安に思うのは俺の前に現れる屋敷の男どもが全員こわもてだったということだ。

車から降ろされて屋敷の中に入ると美姫さんは別の部屋に連れてこられた。

俺は今にも心臓が張り裂けそうな勢いのまま和式の部屋に連れてこられると、乱暴にそこに捨てられた。

部屋の中には周りにこわもてが数十人くらいいて俺を囲むように立っていた。

さりにしばらぐすると、こいつらの親分のよつなおつさんが部屋に入ってきて、俺の前に座り込んだ。

「テメー、ここをどこだか知つてんのかい？」

随分と低い声でしゃべる相手に俺は恐怖の限界を感じていた。

「い、いや～、さつぱり。でも、みなさんやつぱり、ど、どこのやくざさんとかですよね～」

俺はなるべく怒りを買わないようなしゃべり方をした。おそらく無駄だらうが・・・。

「俺らはよ、やくざの世界じゅう誰でも知つてゐる関東やくざ一家の一角。常夜の十六夜一家と聞きや～、逆らつものはねーんだよ？堅気には聞きなれねー名前かも知れねーがな」

「い、十六夜組つ？！」

俺もどちらかといえばそつちの世界の人間だから、その名前は何度も聞いたことがある。おそらく、本当の堅気でも、知らない奴はないだろう。

俺らの世界では、常夜一家と言われば通じてしまう、最も関わってはならないやくざ一家として有名だつた。

「そ、その名前なら十分聞き及んりますっ！…そ、それでっ、俺に何か用でも？」

「しらばつくれてんじゃねーよ？うちの一人娘をたぶらかしといてよつ。身に覚えがないとは言わせねーぞ！」

たぶらかした覚えなら何度もある。それが職業だし……ただ、誰がこの親分殿の一人娘なのかは全くわからなかつた。

今まで騙してきた数もさることながら、それっぽい奴も騙した中には何人か混ざつていたからだ。

「お、覚えがないというか……。本当にそれは、俺なんでしょうか？」

「はつ？！」つちはな尾行してしつかり証拠押えてんだよ！…テメーはやくざ界のルールに従つて死んでもうぜい！」

俺はその言葉と同時に親分が懐から取り出した短刀を見て、命を終わりを察した。

親分が勢いよくそれを身動きの取れない俺に突き刺そうとした、まさにその瞬間だつた。

「パパッ！…いい加減にしてください！」といつ声とともに思い切り開いたふすまの音で、親分の短刀は俺の胸の一ミリ先で止まつた。命を救つたと、涙を流しながら親分を止めた声の方を見ると、そこには美姫さんが立つていた。

「み、美姫さんっ！…」

俺の声に気が付き、駆け寄ってきた美姫さんは「ごめんなさい…」と呴きながら俺の手のロープをほどいてくれた。

「美、美姫さん。君つて、この一家の子供だつたの？」

「はい・…・」

美姫さんは一度も俺と目を合わせることなく頷き、一家の親分に向かつて怒りだした。

「パパッ！…この人は私の命の恩人だつて何度も話したじゃないです

か！－この人は私をたぶらかすどころか、行き場のない私を何も言わずに救つてくれた大切な方なんですか！」

「で、でも！－パパに内緒で、年頃の娘が男と一つ屋根の下なんて…

・

「パパは私にちくいち見張り役をつけてるじゃないですか…家出した後もつ。わざわざ言う必要ありません」

「だ、だがな」

美姫さんへのうらうらえぶりにさつき見た親分としての威厳が嘘のようだった。

「とにかく、もう二んなことはしないでください。紫闇さん、今夜は遅いですから、どうぞ家にとまつてください。部屋を用意させますから」

「い、いや俺は…」

「早くここから逃げ出したいですか？」

「いえっ！－ぜひ泊まらせていだきますっ！」

俺はとっさに心にもないことを言つてしまつた。厳密にはとっさとこうよりも、断られそうになつた時の美姫さんの悲しそうな表情を見た、いかついお兄さんたちからの視線に根負けしたのだ。

その日の夜、俺は全く寝付けなかつた。美姫さんがまるで宿屋のような立派な一室を用意してくれたのだが、やくざ一家の家と聞いてぐつすり寝れる奴なんてこの世のどこにもいないだろう。

それにもまさか美姫さんが常夜一家の娘だつたとは。人はみかけによらないなんて言葉は彼女にこそふさわしい。

そんな事を考へていると、ふすまをたたく音で俺は布団から起き上がつた。

「はい？」

「あ、あの、美姫です」

俺の部屋に訪れたのは美姫さんだつた。

するのちは失敗、何もしないのは大失敗

部屋に訪れた美姫さんを部屋に通すと、彼女はいきなりこの言つてきた。

「しばらくはここには誰も来ないと思います。今のうちに逃げてください。後は私がなんとかしますから」

あまりにも予想だにしていなかつた言葉に俺は混乱してしまつた。

「なんていきなり・・・」

「紫闇さん、早く帰りたいと思つてるでしょ？」

俺はあまりにも的確な答えを出されてしまい、心拍数が少し上昇した。

「なんでそんな事・・・」

「ここに来る一般人はみんなそういう顔をするんです」

「えつ？」

「どんなに仲良くなつた子だつて、私の事情を知れば遠ざかつて行つてしまつ。だから私はそのうち自分から人と関わらないようになつていきました。だから、紫闇さんがなんのためらいもなく私を受け入れてくれてとてもうれしかつたです。・・・でも、ふと気がついたんです。あなたが優しくしてくれたのは私の事情を知らなかつたからなんだと。紫闇さんが本当は逃げ出したいというのならつ」

「俺は、ここから逃げねーぞ」

「えつ？！」

俺は自分でも驚くような言葉を出した。おそらくここから逃げ出

せる唯一のチャンスを逃したのだから。

「俺がここから出て行くときは、お前も一緒に連れていく

「でも、私の事怖がつていいんじや？」

「俺が怖がつてたのはやくざであつて、お前じやないよ。たとえお前がどんな事情を持っていたとしても、俺がお前を好きなのは変わ

らない」

「す、好きつ！？」

俺はついヒートアップしそぎて自分でも気がつかない「元気」と言ふ事でもない事をいつてしまった。

「す、好きつてのはあれだぞつ。お前の性格を嫌いになれないつてことだ！」

「いのなるとなにを言つても、そういう意味にしか聞こえなくなつてしまつた。

「ど、どりあえず！俺はこの世で誰からも愛されている奴がいないと思つし、逆に誰からも愛してもらえない奴だつてないとおもう。外の世界がお前の事を拒むなら、俺がお前の友達になつてやるからつ」

その言葉を聞いた美姫さんは「ありがとうございます」と言ひながら泣き出してしまつた。

それにしてもあの言葉を言つてからの「これはどう聞いても告白にしか聞こえないのは俺だけだらうか・・・。言つておくけど、俺はそういう意味で言つたわけではないから！ただ、こんだけ純粹な奴がこれ以上傷つく姿を見たくなかつただけで。第一、俺とこいつとは詐欺師と獲物の関係だつてことを忘れるなよつ！」

俺はあくまで詐欺師として、こういつ事を言つているんだからな。するのは失敗、何もしないのは大失敗つて言つようて、俺はたとえやぐざの娘であろうと騙しぬいて、生き抜いてやるんだ。

「だから、逃げるなら一緒につ

バンツ！！

気を取り直して、美姫さんに話しかけた俺の声をかき消す勢いでいきなり部屋のふすまを開けたのは彼女の父親だつた。

「話は全部聞いたぞ。ちょっと来てもらおうかつ！！」

父親の顔はとても恐ろしい顔をしていた。まさか、俺のあの告白ともとれる言葉を聞いてしまつたのだろうかつ。

それとも、泣いている娘を見て何かを勘違いしているのかつ。

どちらにしろ俺は命の最期を改めて予感した。

アワハの眞の片思い

俺と美姫さんは美姫さんの父親に連れられて、誰もいない部屋に来た。

部屋に入ると父親は美姫さんに尋ねた。

「美姫、さつきの話だが、お前はその男に告白されたのか？」

父親の率直な質問に對して美姫さんは頬を赤らめながら答えた。

「は、はい・・・

えつ？！ そうだったっけ？！

彼女に悪気はなかつたのだろう。だが、おそらく恋愛経験や同い年の男性との関わりがあまりに少ないとから、俺のあの言葉を思いつきりプロポーズと勘違いしてしまつっていた。

「そうか・・・。お前はどうするんだ？」

「わ、私も紫闇さんのこと、大好きです！」

えつ？！ そうだったの？！

まさか、この短時間でこんなにも彼女が俺を思つていたなんて想像もしていなかつた。俺にとつては彼女ができたというより、年下に懐かれたような感覚でしかなかつた。

その後彼女の心の内をすべて聞いた父親は美姫さんを先にさがらせ、しばらく俺と父親との沈黙が続いた。

「・・・おじつ、お前つ

先にこの沈黙を破つたのは父親だった。

「はいっ！」

「お前は、本当にあいつを愛しているんだるうな？」

「えつと・・・、あ、あれはプロポーズというわけでは・・・

「なにっ？！」

俺の言葉を聞いた父親の顔が恐ろしい形相へと変わつていった。「ブ、プロポーズとかそんなのではなく、彼女の昔の話を聞き、今でも変わらず苦しんでいるあの子の心を少しでも楽にしてあげるた

めに、まずは彼女の悩みの種のうちの一つである交友関係を俺と友達になることで晴らしてあげようという事で・・・

俺はなるべくさし障りのないよう、先ほどの誤解を解こうとした。

すると、話を聞いた父親は立ち上がり、段々と俺のそばに歩み寄ってきた。まるで鬼神が歩み寄つて来るかのようなその威圧感に俺はどうする事も出来ず、ただ固まつていた。

俺の目の前まで来た父親はしゃがみこみ、彼の右手を大きく振り上げ・・・、俺の肩に置いた。

「お前のような男を待つていたぞ!」

「は、はい?」

俺は言葉の真相が全く読めなかつた。ポカーンとしている俺の顔を見ながら父親は笑顔で俺に話しかした。

「今まであいつの元に来た求婚者は、いずれも詐欺師か遊び人のチヤラ男だつた。だが、お前はそのどちらでもない」

せ、先人がいたー!!

まさか、俺以外にもあいつを狙つていた詐欺師がいたとは・・・。

「あ、あの～ちなみにその方たちはその後どうなつたんでしょうか?」

「チヤラ男はわしらを見た瞬間、脱走したために島流しにした。詐欺師は、最後まであいつを騙し続けたのに気付き、我らのルールで抹殺した」

詐欺師の先輩は先にあの世に葬られていた事に気が付き、俺は一気に目の前が真つ暗になつた。

「そんな事が続いたためか、そのどちらにも似つかわしいお前を少々危険視していたが、わしの勘違いだつたようだな」

なぜ勘違いという結論にたどり着いたのかは知らないが、さすがはやくざの頭だけあつて、勘は鋭いらしい。

「なぜ、僕はそいつらとは違うとお考えになつたんですか?」

「お前はしっかりと順序をわきまえていたからだ」

「順序？」

「初めはあの言葉を告白かと思ったが、あれはわしらの勘違いで、お前はお友達から始めてくださいと言ったかったのだろう？」

えっ・・・。さらに勘違いされているー！！！

まさかあの誤解を解くための言葉をさらに誤解されて聞かれていたとは・・・。

「美姫も今までの誰より、お前を気に入っているようだしな。これからもあいつの事をよろしく頼むぞ。それから、同居も認めてやる。これは完全にアワビの貝の片思いというやつだ。

まあ、最悪の事態は逃れたし、これも一種の逆転劇なのだろうか。

ひつして、俺と美姫の恋愛劇場が幕を開いたのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2126ba/>

詐欺師も所詮は男であって・・・

2012年1月10日15時57分発行